

子供・教師のウェルビーイングを高める学校改革 －教育政策における「ウェルビーイング」の捉え方と取組－ 【趣旨説明】

文部科学省 国立教育政策研究所

教育政策・評価研究部長

(命)教育データサイエンスセンターセンター長特別補佐

藤原 文雄

*本研究は、「日本の子供・教師のウェルビーイングを高める学校革新に関する研究」【令和7～9年度】研究代表者 藤原文雄(教育政策・評価研究部長)の一部である。

概要については、国立教育政策研究所ウェブサイト https://www.nier.go.jp/05_kenkyu_seika/seika_digest_r07.html に記載

ウェルビーイング(良き状態)についての 教育政策における言及

【第四期教育振興基本計画】(2023年策定)

ウェルビーイングと学力は対立的に捉えるのではなく、個人のウェルビーイングを支える要素として学力や学習環境、家庭環境、地域とのつながりなどがあり、それらの環境整備のための施策を講じていくという視点が重要である。

ウェルビーイングを高めるためには、教師のウェルビーイングを確保することが必要であり、学校が教師のウェルビーイングを高める場となることが重要である。子供の成長実感や保護者や地域との信頼関係があり、職場の心理的安全性が保たれ、労働環境などが良い状態であることなどが求められる。加えて、職員や支援人材など学校の全ての構成員のウェルビーイングの確保も重要である。こうしたことが学びの土壌や環境を良い状態に保ち、学習者のウェルビーイングを向上する基盤となり、結果として家庭や地域のウェルビーイングにもつながるものとなる。

【中央教育審議会「令和の日本型学校教育」を担う質の高い教師の確保のための環境整備に関する総合的な方策について(答申)】(2024年答申)

教師のこれまでの働き方を見直し、長時間勤務の是正を図ることで、教師の健康を守ることはもとより、日々の生活の質や教職人生を豊かにするなど教師のウェルビーイングを向上させることが重要である。

(中略)柔軟な(働き方の:筆者注)仕組みは、教師が自分自身のウェルビーイングについて主体的に考え、対応していくことができるという点においても望ましいものであり、その推進をしていくことが求められる。

ウェルビーイングの概念

現在、日本を含めた世界各国の教育政策で子供・教師のウェルビーイングの向上が目指されている。しかし、ウェルビーイングという概念は、規範的性格を有し、かつ学際的で多次元的な概念であることから、その概念規定や構成要素について、国際的にもいまだ明確なコンセンサスは形成されていない。こうしたことから、ウェルビーイングという概念は、「厄介な問題」とであると指摘されることがある。

“実際、ウェルビーイングは複雑で議論の分かれる概念であるため「厄介な問題」と見なされている(Bache, Reardon, & Anand, 2016)。Bacheら(2016)が説明する通り、「厄介な問題」とは定義が不明確で決定的・客観的な答えが存在しない問題を指すならば、ウェルビーイングはこの定義に当てはまる”

(Svane, Denise, Evans, Neus, and Carter, Margaret (2019) Wicked wellbeing: examining the disconnect between the rhetoric and reality of wellbeing interventions in schools. Australian Journal of Education, 63 (2). pp. 209-231.)

実際、ストレスをはじめとする個別の構成要素については、これまでも十分な理論的・実証的研究が蓄積されており、あらためてウェルビーイングという包括的概念を用いる必要性は必ずしも高くないとする見解も想定される。

しかしながら、ウェルビーイングという概念は、単に既存の指標を束ねた集合概念にとどまらず、「良き状態(well-being)」という規範的視点から現状を可視化し、ときに問題状況を告発する機能を有するとともに、その背後にある構造的要因を分析し、改善を促進するための分析枠組みとしてのパワーを持つ概念である。

「日本の子供・教師のウェルビーイングを高める 学校革新に関する研究」【令和7～9年度】(概要)

日本においても、子供および教師を対象としたウェルビーイング研究は進展しつつある。露口(2023;2024)や神林(2021)などにより、学校組織やリーダーシップ、職務環境との関連を視野に入れた実証的研究が蓄積されている。しかしながら、理論的枠組みの整理や国際比較を踏まえた政策分析、さらには日本固有の教育制度や文化的文脈(内田、2025)を踏まえた政策研究の推進という点では、なお検討の余地が大きい。

そこで、本研究は、いかなる政策的・制度的介入が子供及び教師のウェルビーイングの向上に寄与しうるのかを分析的に明らかにすることを主たる目的とし、以下の研究課題を探究する。

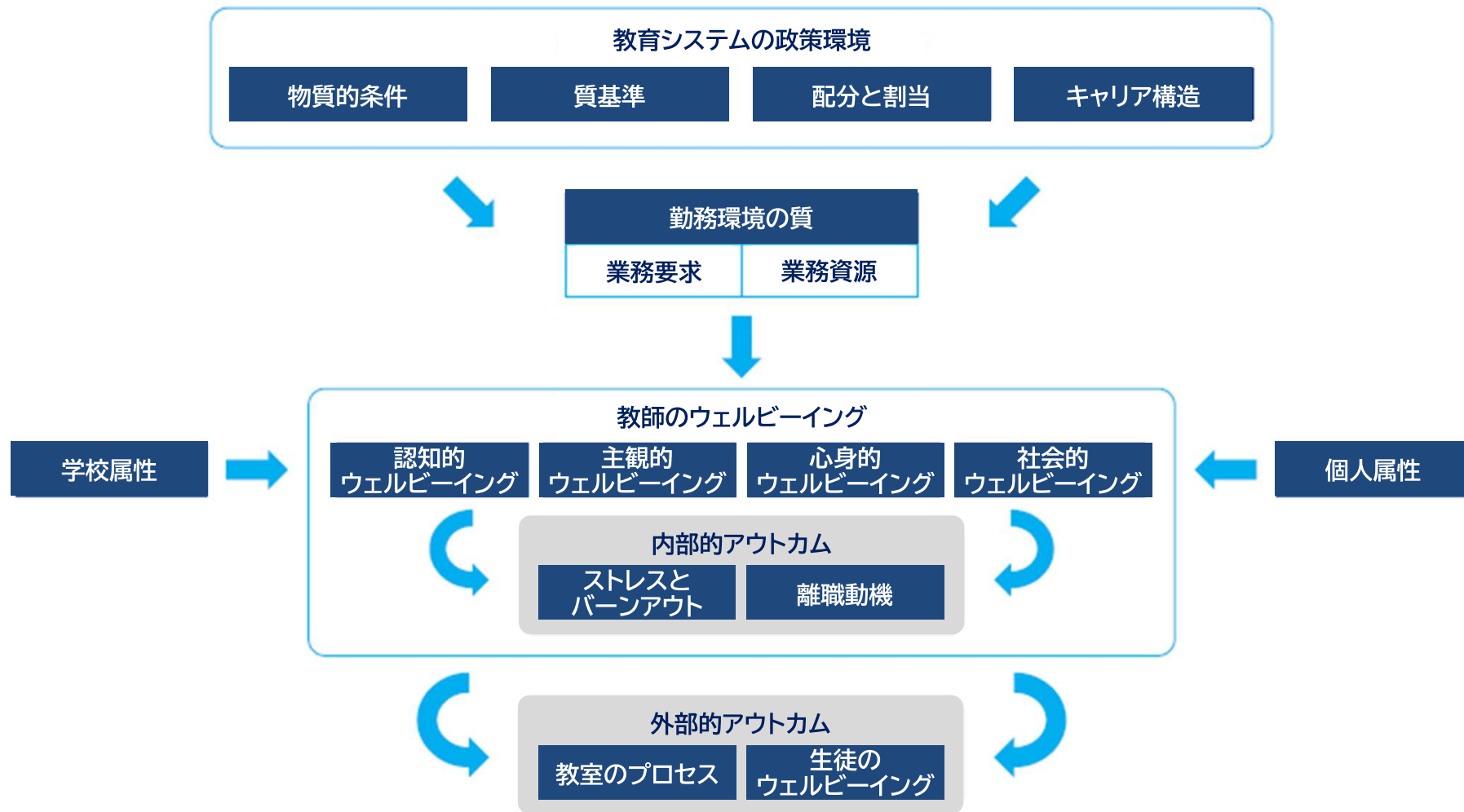
RQ1. 教育政策におけるウェルビーイング概念は、どのような理論的枠組み・及び政策目的のもとで導入されてきたのか。【文献研究】

RQ2. 日本の子供および教師は、学校文脈においてウェルビーイングをどのように意味づけ、経験しているのか。【インタビュー調査】

RQ3. 子供・教師のウェルビーイングを高める要因は何か。また、両者のウェルビーイングにはいかなる相互関連構造が認められるか。【質問紙調査】

RQ4. 諸外国の教育政策において、ウェルビーイングという概念はどのような位置を占め、どのような施策が講じられているか【比較研究】

教師の職業的ウェルビーイングの概念的枠組み



(出典)Viac, C. and P. Fraser (2020), “Teachers’ well-being: A framework for data collection and analysis”, OECD Education Working Papers, No. 213.

同研究では、教師の職業的ウェルビーイングを「仕事と職業に関わる認知的、感情的、健康的、社会的条件に対する教師の反応」と定義している。また、「次元は密接に関連しているが、それぞれが仕事における教師の幸福に関連する特定の指標群を包含しているため、別個のものでもある。各次元は、他の次元、ひいては教員のストレスレベル全体や将来の仕事への取り組みに関して、結果として、またそれを可能にする条件として考えることができる。」と指摘している。

OECD Teaching Compass: Reimagining Teachers as Agents of Curriculum Change(2025)

専門職として成長し続ける教師のウェルビーイング(Teacher well-being for thriving professionals) = 「専門的な目的意識を基盤とし、知的刺激、社会情緒的支援、身体的安全を統合した、充実したダイナミックな状態(a dynamic state of fulfilment, integrating intellectual stimulation, socio-emotional support and physical security, grounded in a sense of professional purpose)」

表 次元と構成概念の例

教師のウェルビーイングの類型	身体的ウェルビーイング	認知的ウェルビーイング	社会的・情緒的ウェルビーイング
次元と構成概念の例	<ul style="list-style-type: none">・ 労働条件・ ワークライフバランス・ 身体的健康と安全	<ul style="list-style-type: none">・ 知的エンゲージメント・ 所有感・ 専門的成長	<ul style="list-style-type: none">・ 自尊心と承認・ レジリエンスと自己への思いやり・ 共感、信頼、協働

- 身体的ウェルビーイングは、労働条件、ワークライフバランス、教育環境の物理的安全性と快適性が担う中心的な役割を強調する。公正な給与、管理可能な業務量、支援的なリーダーシップ体制は、教育者の意欲を高め、教育への長期的な献身を確保する上で極めて重要である。
- 認知的ウェルビーイングは、教師の精神的・知的健康を重視し、批判的思考、問題解決、意思決定への取り組み方を含む。三つの相互に絡み合った概念が認知的ウェルビーイングを支えている。
- 社会的・情緒的ウェルビーイングは、教育者の繁栄を促す原動力である。教育者の活力を支える脈動である。これは教育者が同僚、指導者、保護者、そして最も重要な生徒とどのようにつながるかを形作りながら、彼らが繁栄するために必要な内なる資源を育む。

OECD国際教員指導環境調査(TALIS)結果の読み解き方

TALIS(Teaching and Learning International Survey)は、教員および校長の勤務環境や学校の学習環境に焦点を当てた国際調査である。専門的な学習の機会、学校における指導やマネジメントの状況などについて、教員および校長の自己申告に基づく国際比較可能なデータを収集し、教育に関する分析や教育政策の検討に資することを目的として実施されている。この点において、TALISは、教師および学校長に主眼を置いたOECDの初の国際調査である。

一方、OECDは、自己申告データが回答者の信念や認識を把握することを可能にする反面、その解釈に際しては、文化的背景や回答傾向の影響を受ける可能性があることに注意を喚起している。さらに、各国において教育政策や規制が異なることを踏まえ、TALIS の報告書では、可能な限り各国の教育政策の文脈や制度的特徴が報告書全体を通して提示されている(OECD, Reader's Guide, 2025)。

こうした TALIS の特徴を踏まえれば、データの解釈においては、単純な数値の高低や国際ランキングに基づく比較ではなく、指標間の関連性や、各国の政策・制度的文脈を前提とした分析が求められる。

TALIS2024(中学校)におけるWB関連指標

次元	概念	質問項目	OECD平均	日本
身体的 ウェルビーイング 教師が安心して、 無理なく働ける状 態	労働条件	直近の1週間において、職務に関連する業務に何時間費やしたか	41.0時間	55.1時間
	ワークライフバランス	私生活を送る時間を確保できている	47.1%	24.7%
		職務上のストレスを感じる	48.6%	52.4%
		物理的健康と安全	教員としての職務が精神的に悪影響をもたらしている	28.0%
認知的 ウェルビーイング 教師が課題に没頭 し、当事者として 判断に関わり、専 門職として成長し 続けられる状態	知的エンゲージメント	教員としての職務が身体的に悪影響をもたらしている	23.1%	29.5%
		教えているとき、しばしば幸せだと感じる	94.0%	88.4%
		概して、熱意をもって教えている	96.3%	94.2%
	当事者意識	教えることの面白さややりがい満足している	89.8%	91.8%
		この学校では、教職員が学校的意思決定に積極的に参画する機会を提供している	78.2%	74.0%
	専門職としての成長	授業の計画と準備において裁量がある	93.1%	88.4%
		専門的な学習活動は、指導に対し全体的に良い影響がある	55.2%	39.6%
		他にやるべきことやしなければならないことがあるため、専門的な学習に時間が割けない	63.4%	85.6%
		生徒に勉強ができると自信をもたせる(効力感)	85.3%	28.3%
		生徒間の学力格差を縮める(効力感)	59.3%	18.2%
社会的・情緒的 ウェルビーイング 教師が信頼と承認 を得ながら、情緒的 に安定し、安心して 協働・挑戦できる状 態	自己価値・承認	全体としてみれば、この仕事に満足している	89.4%	78.8%
		教員であることは、悪いことより、良いことの方が明らかに多い	73.9%	71.9%
		現在の学校での自分の仕事の成果に満足している	92.0%	53.6%
		職務に対して支払われる給与に満足している	38.7%	28.6%
		給与以外の教員としての雇用条件に満足している	68.4%	37.3%
		今後5年以内に授業をする立場を離れる可能性(定年退職を除く)がある	16.6%	8.0%
	支援・関係性	勤務校においては、教員は、互いに信頼しあうことができる	85.8%	76.9%
		勤務校においては、お互いに助け合う協力的な学校文化がある	82.4%	80.7%
		校長は、教職員に対して有益なフィードバックを行っている	77.2%	68.8%
		勤務校では、教員は生徒に高く評価されている	70.7%	54.2%
		勤務校では、教員は保護者に高く評価されている	65.4%	45.0%
	国や地域では、教員はメディアに高く評価されている	19.8%	9.2%	

(出典)OECD(2025) Teaching Compass: Reimagining Teachers as Agents of Curriculum Change, 29-32をもとにTALIS2024におけるウェルビーイング関連指標を抽出した。なお、ここで掲載している質問項目は、ウェルビーイングに影響を及ぼす労働環境やウェルビーイングのアウトカムに分類が可能なものも含まれている。本表は、OECDによる公式な整理ではないことには留意されたい。数値は原則として、「非常に当てはまる」「当てはまる」など4件法による回答で肯定的な回答をした教師の割合。質問項目の翻訳は筆者が行ったものである。

日本の教師のウェルビーイング

(1) 身体的ウェルビーイング

日本の教師は、OECD諸国と比較して勤務時間が長く、ワーク・ライフ・バランスが極めて低い水準にある。一方で、疲労やストレスを感じていると回答する教師の割合は、OECD平均と比べて必ずしも大きな差はみられない。

(2) 認知的ウェルビーイング

日本の教師は、OECD諸国と比較して、知的エンゲージメントについて同じように高い水準にある。一方で、専門職として学び続けるための時間が十分に確保されておらず、専門的な学習が良い影響を及ぼしているという実感や、自己効力感は低い。

(3) 社会的・情緒的ウェルビーイング

日本の教師は、OECD諸国と比較して、仕事に対する満足度は幾分低い水準であるとは言え、約8割の教師が満足している。一方、成果についての満足度や社会、保護者、メディアから評価・承認されているという感覚は低い。また、離職意向は相対的に低い。

現在、「教師を取り巻く環境整備の更なる推進等」や「現行学習指導要領の着実な実施と次期学習指導要領の検討」、「ICTを活用した教育の推進」、「教師の資質能力の向上」などの施策が進められている。

こうした施策動向を踏まえ、日本の教育制度や文化を前提した日本の教師のウェルビーイング(専門職としての機能を十分に発揮し得る状態)を実現するための学校の在り方や条件整備に関する政策研究を、一層推進していくことが不可欠である。

(出典)OECD(2025) Teaching Compass: Reimagining Teachers as Agents of Curriculum Change, 29-32をもとに TALIS2024におけるウェルビーイング関連指標を抽出した上でそのデータに基づいて分析した結果。OECDによる公式な整理ではないことには留意されたい。

教師のウェルビーイングと 子供のウェルビーイングの関連について

子供の学力とウェルビーイング、そして、教師のウェルビーイングと子どものウェルビーイングが相互に強化し合う関係になるよう教育制度設計が求められる。

教師のウェルビーイングと子どものウェルビーイングとの関係は、少なくとも二つのメカニズムから理解される必要がある。第一に、教師個人のウェルビーイングが、教室内の相互作用や学習環境を媒介して子どものウェルビーイングに影響を及ぼすというメカニズムである。第二に、学校全体のウェルビーイングが、教師と子ども双方のウェルビーイングを同時に規定するという、学校レベルのメカニズムである。

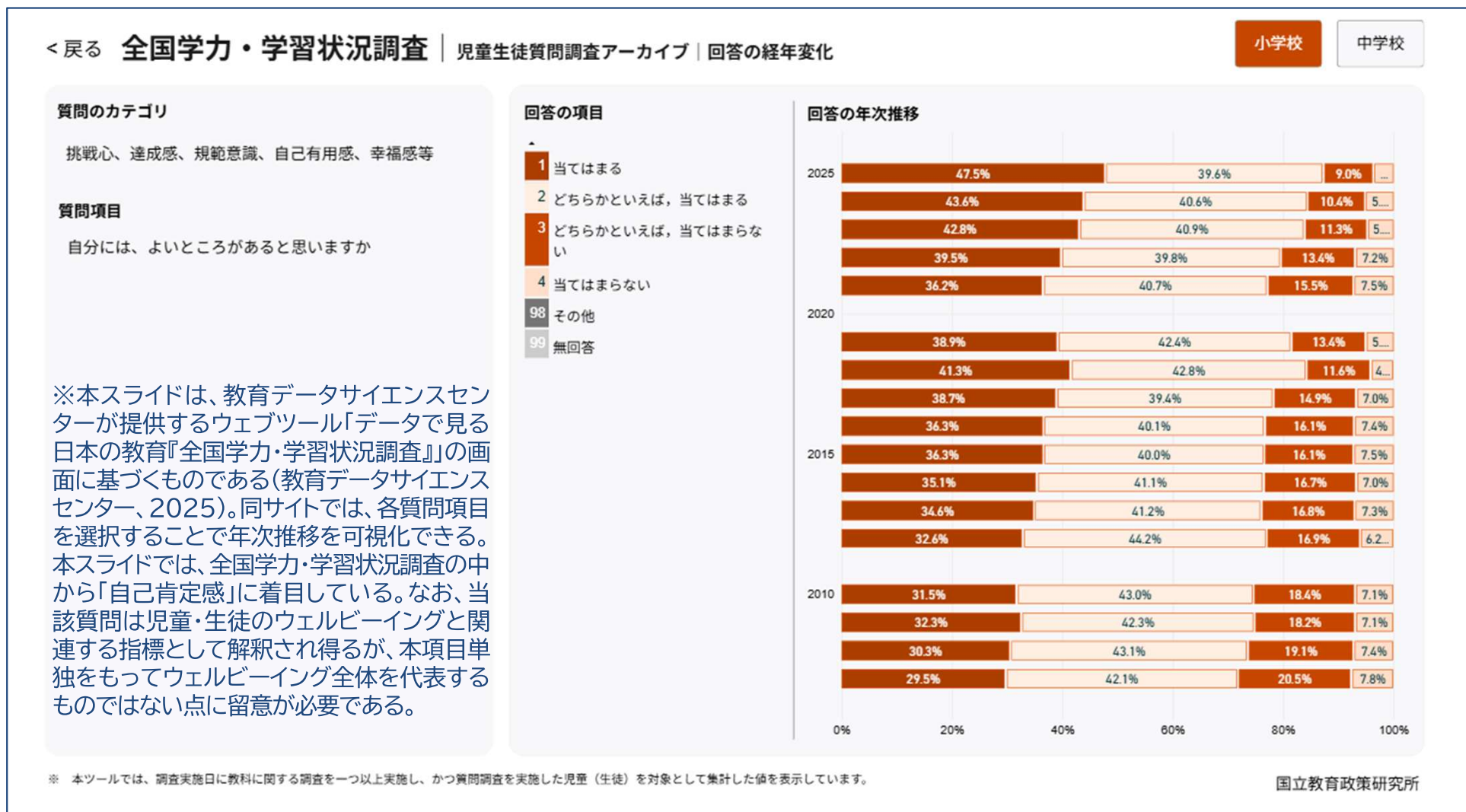
(1)教師のウェルビーイングがより支援的な学習環境を創出し、子供のウェルビーイングに影響を及ぼすというモデル

「ワーク・エンゲイジメントのレベルが高い教師は、より質の高い情緒的サポートと指導的サポートを示す一方、バーンアウトのレベルが高い教師は、より質の低い指導的サポートを示す可能性がある(Chan, S. W., Pöysä, S., Lerkkanen, M.-K., & Pakarinen, E., 2023)」

(2)学校のウェルビーイングが子供のウェルビーイングに影響を及ぼすというモデル

「学校のウェルビーイングとは、学校コミュニティのすべての関係者にとって、心理的、社会的、身体的、経済的に安全な学校コミュニティおよび環境と定義されている(Ukskoski, T., & Lerkkanen, M.-K., 2024)」

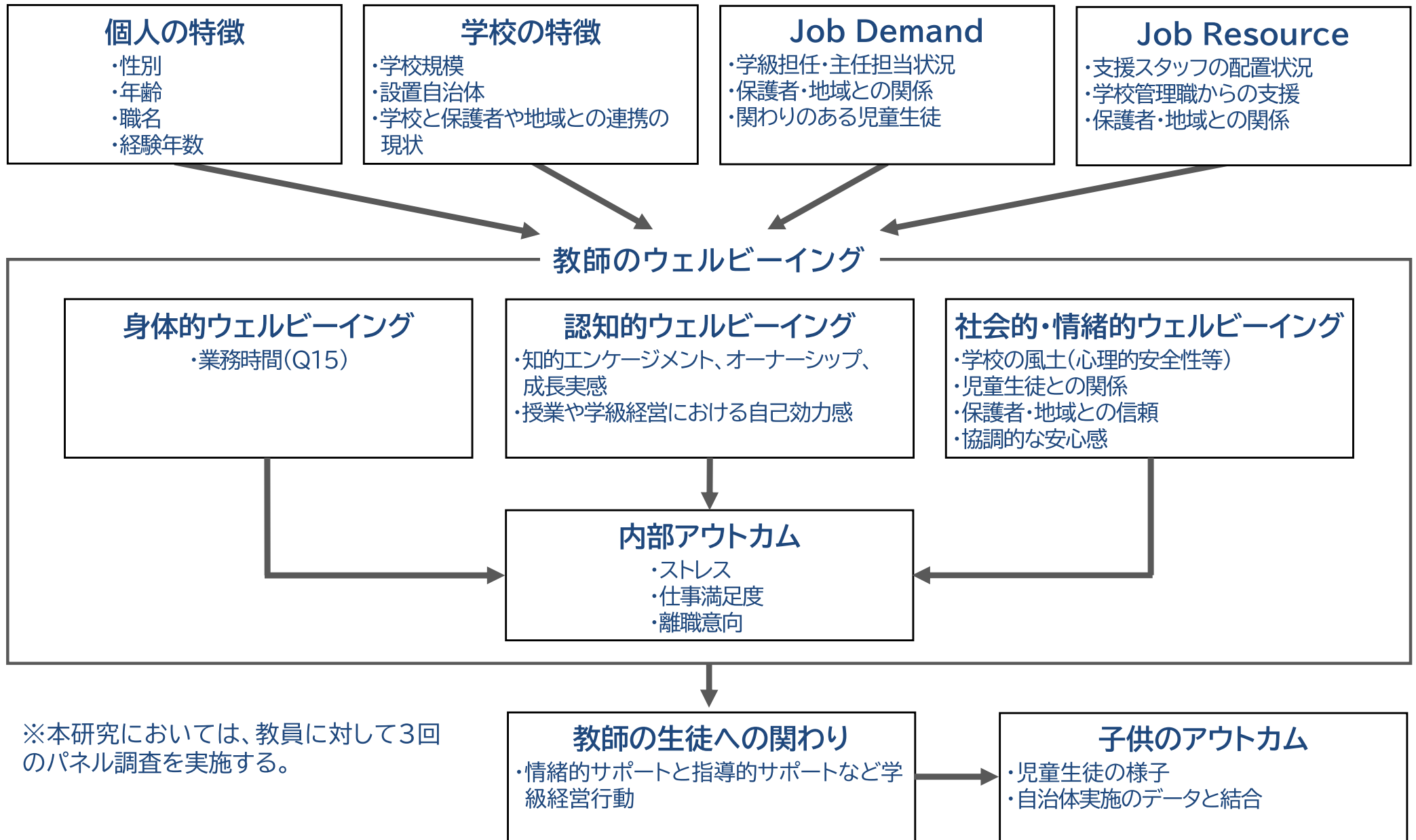
全国学力・学習状況調査における「自己肯定感」に関する小学生の回答の年次推移(2007年～2025年)



(出典)国立教育政策研究所 教育データサイエンスセンター「データで見る日本の教育『全国学力・学習状況調査』」
(<https://www.nier.go.jp/edsc/edp/data/zenkokugakuryoku/index.html>)

※教育データサイエンスセンターでは、国や自治体の政策・実践に役立つ教育分野の調査データや研究成果・取組事例を共有するプラットフォームである「公教育データ・プラットフォーム」を構築している。

本研究の質問紙調査の枠組み



※本研究においては、教員に対して3回のパネル調査を実施する。

教育政策における ウェルビーイングに関する国際比較調査

【調査項目】

- (1) 各国の教育政策(全般)において、ウェルビーイングという概念はどのように位置付いているか。また、各国の教育政策において、ウェルビーイングという概念はどのように捉えられているか
- (2) 各国の教育政策(初等中等分野)において、ウェルビーイングという概念はどのような政策分野に適用されているか。また、どのような施策が講じられているか
- (3) 各国の教育政策(全般及び初等中等分野)において、ウェルビーイングという概念はどのような指標でどのような方法で測定、検証されているか

【調査対象国】

アメリカ、イギリス、フィンランド、カナダ、ドイツ、フランス、オーストラリア、ニュージーランド、シンガポール、韓国、中国

参考文献

- Borgonovi, F. and J. Pál (2016), *A Framework for the Analysis of Student Well-Being in the PISA 2015 Study: Being 15 In 2015*. OECD Education Working Papers, No. 140, OECD Publishing, Paris.
- Chan, S. W., Pöysä, S., Lerkkanen, M.-K., & Pakarinen, E. (2023). Teachers' occupational well-being in relation to teacher-student interactions at the lower secondary school level. *Scandinavian Journal of Educational Research* Volume 68, 1137-1154.
- Education Support(2024)Teacher well-being: a global understanding.(<https://www.ei-ie.org/en/item/28804:teacher-well-being-a-global-understanding>)
- Collie, R. et al. (2015), *Teacher Well-Being: Exploring its Components and a Practice-Oriented Scale*, *Journal of Psychoeducational Assessment*, Vol. 33/8, pp. 744-756
- Curren, Randall, Ilona Boniwell, Richard M. Ryan, Lindsay Oades, Harry Brighthouse, Elaine Unterhalter, Kristján Kristjánsson, Doret de Ruyter, Colin Macleod, Ian Morris, and Mathew White (2024) 'Finding consensus on well-being in education,' *Theory and Research in Education*, 22(2), 117-157.
- Hascher & Waber (2021) Teacher well-being: A systematic review of the research literature from the year 2000-2019. *Educational Research Review*, Volume 34, 1-25.
- 神林寿幸(2021)「公立小中学校教員の生活満足度を規定する要因」『日本労働研究雑誌』63(5), 81-93.
- OECD(2025) *Teaching Compass: Reimagining Teachers as Agents of Curriculum Change*. OECD Education Policy Perspectives. No. 123, OECD Publishing, Paris.
- Ozturk, Wigelsworth & Squires(2024) A systematic review of primary school teachers' wellbeing: room for a holistic approach.*Frontier in Psychology*,10, 1-27.
- Skaalvik & Skaalvik(2018) Job demands and job resources as predictors of teacher motivation and well-being. *Social Psychology of Education* 21:1251-1275
- Soah Kimほか(2018)『教師のウェルビーイングの支援方策』、韓国教育開発院。
- Tsuyuguchi(2023) Analysis of the determinants of teacher well-being: Focusing on the causal effects of trust relationships. *Teaching and Teacher Education*, 132, 1-15.
- 内田由紀子(2025)『日本人の幸せーウェルビーイングの国際比較ー』中公新書。
- Ukskoski, T., & Lerkkanen, M.-K. (2024) Developing Teachers' Collaborative Expertise in School Well-being. *Journal of Teacher Education and Educators*, 13(3), 167-183.
- Viac, C. and P. Fraser (2020) *Teachers' well-being: A framework for data collection and analysis*, OECD Education Working Papers, No. 213, OECD Publishing, Paris.